

## アートの作業化に向けた取り組み

姫路市立障害者支援センター  
管理支援員 中川 明美  
支援員 小田 健司

### 【はじめに】

姫路市立障害者支援センター（以下「当センター」という。）は、平成29年9月にかしのき園、しらさぎ園、しいのみ園の3つの園が統合して、通所の多機能型事業所となった。自立訓練、就労移行支援、就労継続支援B型、生活介護の4つの事業を運営し、喫茶や製菓、内職など、作業種別や障害特性に合わせて9つの班に分かれて様々な作業に取り組んでいる。

当センターの生活介護は生産活動を行っており、利用者が毎日元気に登所して、がんばって働く姿が当たり前前の光景といえる。どんなに障害が重くても、毎日通所して「はたらく」ことで工賃を得、自分が欲しかったものを買ったり、行きたかった場所へ行くという社会人としての自己実現を大切にしてきた。

当センターの生活介護では、平成26年から作業としてアート作業に取り組んできた。今回は、長年にわたり続けてきたアートの取り組みについてまとめたい。

### 【アート作業の成り立ち】

生活介護では、障害特性に合わせて部品の組み立てなど作業中心の班と、午前作業、午後は様々な活動を行う班があった。その中の午後の活動プログラムの一つとして、外部の講師を招いて「絵画教室」を実施していた。「～を作る、～を描く」という目的が毎回きちんとあり、時間内で目的に沿った作品を作り上げるプログラムであった。しかし、講師がいなくなってからは、職員だけで2～

3年続けていたものの、単なる工作の時間になってしまい、目的を見失って迷走していた。さらに、重度の知的障害のある利用者にとっては、約1時間座って創作に取り組むことは難しかった。

そこで、新しいアート活動のプログラムとして「くりえいてい部」を考案した。桜や紅葉などテーマに応じて色使いを絞る程度で、決まった手順や方法がなく、正解やゴールがない創作活動の時間とした。一人ひとりの得意とする表現方法で自由に創作し、出来上がったものからイメージして、最後に形にしていっていった。自由度が高いため、これまで絵画教室に参加できていなかった利用者も、アート活動に取り組む時間となり、これまで知らなかった利用者のアートの力を感じた一歩だった。



くりえいてい部の様子



くりえいてい部の様子

一方、生活介護では「はたらく」ことを大切にしているため、従来から重度の知的障害のある利用者も作業に従事し、タオルたたみや部品の組み立てなどの内職作業に取り組む時間を確保してきた。しかし、激しい行動障害のある利用者も多く、これらの作業の適性がある利用者は一部に限られていた。何か利用者全員ができる作業がないだろうか、職員みんなで悩み続け、これまで続けてきたアート活動を作業化していくことにたどり着いた。

### 【アート作業の商品化】

#### ① オーラルピース

作業としての商品作りとなるとそう簡単にはいかず、試行錯誤を繰り返していた時期に、障害のある方の社会参加と収入向上の考えのもと生まれた※「オーラルピース」の委託販売を受けることになった。

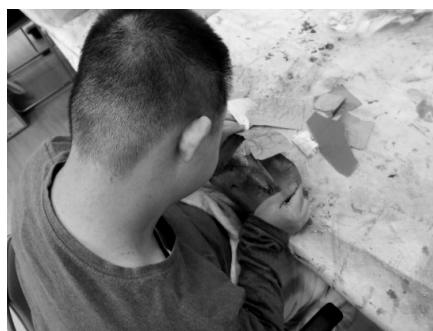
商品の委託販売の作業であるが、加えて商品を入れる紙袋やチラシ作りをすることで、アートの力を活かし、販売に貢献できるのではないかと様々な工夫をした。

まずは、室内作業として「描く」、「ちぎる」、「押す」など利用者それぞれの得意なことを中心に作業工程を分担し、1人でも作業に取

り組めるようにした。そして、みんなの力が合わさった紙袋や値札が一つ一つできあがった。



「描く」



「ちぎる」



「押す」

さらに、普段は黙々と作業を進めるが、見学者が来たり人が集まるところには宣伝活動に出かけた。また、他班のクッキーの販売会がある時は一緒に出品させてもらい、その日に向けてチラシ作りに取り組んだ。室内作業だけにとどまらず、配達をしたり営業に行ったり、「ありがとう」と言ってもらえることで、お客様と直接触れ合える楽しさも知ることになった。



縮がある利用者も小さい固いものを握ることが難しい利用者も、風船であれば手にフィットしやすい。押す力加減もやさしく押せば小さな丸になり、力強く押せば大きな丸になり、どんな押し方も失敗にならない。一枚一枚手作りの名刺作業の始まりであった。

はじめは職員中心に向けた名刺作りであったが、今では関係機関の方や特別支援学校の先生など口コミで広がり、様々な方から注文をいただくようになった。



宣伝活動、販売会の様子



風船スタンプで押した名刺

## ②名刺

平成 29 年の事業統合で当センターに名称変更となり、職員全員の所属が変わることを機に、職員向けの新しい名刺作りを作業にできないか検討した。利用者の作品を活用して商品化してみたが、印刷が主な作業となってしまう、利用者が関わる場面が少ないため方法を再考した。試行錯誤の結果、名前などの文字はパソコンで職員が印刷し、余白部分のデザインを利用者に担ってもらうことになった。

直接描きこむと名刺の文字に重なってしまい失敗がたくさんでること、形あるスタンプでは上手に均等の力で押さないと失敗になってしまう。そこで考えたのが、写真にもあるように風船を使った風船スタンプである。拘

名刺作り以外でもアート作業を他に広げられないかと試行錯誤して生まれたのが、Tシャツやトートバッグの商品である。名刺同様に一つ一つ利用者が風船スタンプを押したり、シルクスクリーンに色を入れていく世界に一枚だけのTシャツやバッグとして商品化した。



Tシャツ、トートバッグ

### 【アート作業の展開】

令和2年ごろから新型コロナウイルス感染症の影響や、令和4年のウクライナ情勢により、企業からもらっている部品の組み立てなどの内職作業は激減した。「はたらく」を大切にしている事業所として致命的であり、毎日同じ日課で作業に取り組めることが、いかに利用者のモチベーションや安定につながっているかということを感じた時期であった。

しかし、アート作業はこういった情勢の影響を全く受けなかったため、普段、内職作業をしている利用者もアート作業に従事してもらうことができた。工程を細分化することで作業を単純化し、自閉症の特性を活かす工程を作業として提供することができた。これまで他の作業をしていた利用者にもアート作業に参加してもらい、生活介護全体でのアート作業の取り組みが広がっていった。また、従事する利用者の人数や対象が広がったことで、さらに作業種を増やして、刺繍や草木染

めなどこれまで以上に様々なアート作業の取り組みにつながった。

利用者にとってもアート作業はこれまでにない新しい経験で、丁寧な細かい刺繍や手織りが得意だということがわかった人や、描くことが好きで一人で集中して取り組めるようになった人、引きこもりがちで登所しづらくなっていたが、草木染めや刺繍を始めてから張り切って登所できるようになった人など、作業を通して満足感や達成感を感じる機会となっている。



草木染め、刺繍

一部の利用者だけでは商品作りに時間がかかり、なかなか頻繁に開催することが難しかった販売会も、多くの方が従事することで※「おひさまマルシェ」を定期的を開催することができた。また、※GOOD JOB STORE「あつまろうグッジョブの森 第2期」に応募して選定され、当センター以外で販売されることが決まった。これらの機会や販路の拡大は、利用者や職員にとって作業に

取り組むモチベーションとなり、事業所全体の活気につながった。



おひさまマルシェの様子

### 【これからの課題】

平成26年に手探りで始まったアート作業であるが、10年の時を経てたくさんの利用者や職員の協働により、生活介護の中心的な作業となった。今でも試行錯誤しながらではあるが、毎年広がりを見せている。

この10年の間でも、職員の異動や退職は毎年あり、アート作業に携わる職員も毎年のように入れ替わっている。中心的に進めていた職員が異動してしまうと、取り組みが中断してしまうような感覚になってしまう。しかし、新しい体制ならではの、新しい視点やアイデアが生まれているのも事実である。アート作業に正解やゴールはないため、形にとらわれず、自信をもって進めていく力が必要である。

美術の専門家ではなく、福祉職の職員がアート作業を進めていくことは簡単なことではない。もちろん得意、不得意もある。利用者が作った作品をどう魅せるのか。利用者のアートの魅力をどう引き出せるのか。職員にとっては難しい作業と捉える人もいるだろう。

しかし、利用者とともに楽しんで取り組めない、アート作業は広がっていかない。今後も職員のアート作業に対するモチベーショ

ンを高めていくことが課題である。

### 【まとめ】

アートとは、机に向かって絵を描くことや切り貼りして作り上げるものだけが作品ではなく、表現次第で様々なものがアートとして変容するということを利用者とのアート作業を通して教えられた。

事業所としてアート作業を進めていくためには、利用者の感性や特性を活かそうとすることを職員間で共通認識すること、そして事業所全体での協力体制が必要である。「ただの落書きにしか見えない、どこにでもありそう」など職員に興味関心がないとアート作業が拡大していくことはないと感じている。「こんな感じだと面白いね」「こんな風にしてみたらどう」など、職員や利用者全員で前向きに取り組んでいくことで、職員の感性も磨かれ利用者のアートの力が活きるにつながっていくと思う。

重度の利用者の「はたらく」を実現するために、様々なことに取り組み、そこから生まれたアート作業を今後も充実させていきたい。様々な作品展やイベントに出展し、作品作りのモチベーションを上げ、他事業所など外部からの刺激を受ける機会をできるだけもちたいと思っている。そして、一人でも多くの協働者を増やし、利用者も職員も楽しめるアート作業を今後も行っていきたい。



障害者手作り作品展へ出展

- ※「オーラルピース」は、飲み込んでも安全な食品成分100%・ケミカルフリーの歯磨き・オーラルケア製品。地域の介護施設や医療機関への卸売販売を通して全国の障がい者の仕事づくりを手掛けている。
- ※「おひさまマルシェ」は、年に数回、当センターの玄関先で行う販売会。日々の作業目標にしながら、お客様と直接触れ合える大切な機会である。
- ※「GOOD JOB STORE」は、2016年9月の設立以来、障害のある人たちとの協働から生まれた商品を社会に発信し仕事につなげるために、販売の企画や流通を行っている。商品が選定された場合、GOOD JOB STORE 実店舗とオンラインショップで3か月間販売される。